

おまんじゅう

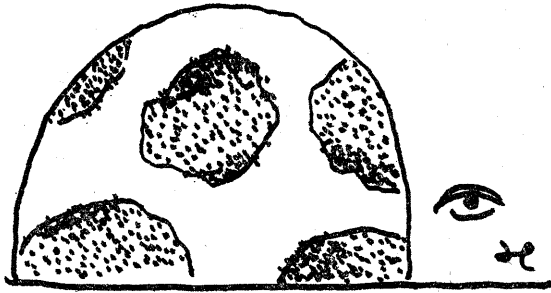
文と絵

柴岡治子

やぶれまんじゅうと言う変な名前のおまんじゅうを、福岡の家の川向いで売っていました。蒸したてのホカホカを買えるせいか、バイキン嫌いのお母さんも、時々それを買って来ておやつに食べました。お母さんは甘いものが好きだったので、やぶれまんじゅうだけは特別にしていたのかも知れません。

普通のおまんじゅうは、白や茶色っぽい色のものがほとんどです。それにあんこは見えませんが、ところがやぶれまんじゅうは皮が破けたように、ところどころあんこが顔を出しているのです。

戦争なんてみんな知らないでしょう。その頃はみなさんに



は想像がつかない位食べ物がなく、お砂糖もありませんでした。おぼさんはあまり甘いものを好きな方ではなかったのですが、さすが戦争中のお砂糖のないのには閉口しました。

冬になると雪が降ります。おぼさんは御殿場という富士山のすそのに疎開していました。雪が降ってとけかかると、まだらに下から土が少し顔を出します。おぼさんはもう忘れていたやぶれまんじゅうを、思わずふっと思い出し、あれがおまんじゅうだったらなあーとタメ息が出ました。大きな大きなおまんじゅうですね。

みんなには想像できるでしょうか。今は街中にいろんな物があふれていますからね。おぼさんも戦争になるまで、あんなに物がなくなるなんて想像もできませんでした。

大勢の人も死んだし、お父さんお母さんが戦争や戦災で死んだ子どももいるし――。

今は夢みたいだけど、本当だったんですよ。